

「水曜サロン with 赤堀会長」第5期 第6回（通算65回）

## 対話型鑑賞の生成過程と多様化

### 1. 内容

- ・対話型鑑賞の捉え方（教育学と美学の視点から）
- ・そもそも鑑賞とは？（鑑賞のための4つのツール）
- ・さまざまな対話型鑑賞（鑑賞活動のどこに重点を置くか）

### 2. 所感

昭和二十二年の学習指導要領に、どれが美しいか、どんなに美しいか話し合う、感想を述べたり討論する、どこまでも自分の眼で見、自分の心で判断すると書かれており、これをベースにして対話型美術鑑賞を広めて来られたことをお話いただきました。鑑賞とは鑑賞者の創造的な活動である。美術作品はアートワークであって、アートは作品と鑑賞者の間にある。鑑賞者が創造するといったところでしょうか。そして、鑑賞について道具に見立ててわかりやすく説明いただきました。ルーペでみる観察、鏡で見る主観（経験、想像力）、メモ帳で情報・知識（背景、時代、文化等を調べる）、鍵で作品の扉を内外に開ける探求（知識と想像力 内的な造形性、情報と関連し他の分野とつながる）

これらのどれかに対話を足したものが、対話型鑑賞になると。

次に対話型鑑賞の授業実践事例をいくつかご紹介いただきました。

- ・中学校におけるゴッホ「ひまわり」の授業（Identityの授業）
- ・「虹のレポート」は、なぜ映画「エリザベス ゴールデン・エイジ」に登場したのか（美術鑑賞と 歴史授業をつなぐ）

映画の中ででてくる「虹のポートレート」は、エリザベスの左腕がつかんでいる虹。太陽なくして虹（平和の象徴）はない。映画のシーンと絵のドレスに書かれている眼や耳、そういったものを、読み解きをしていながら歴史を学んでいく。歴史沼にハマリそうです。

ゴッホのひまわりの絵を見て、「あなたはどのひまわりですか」という問いかけで、メモを作りながら、生徒が答えていく。「高校をどこにしようかと悩んでいて下を向いているひまわり」、「上のひまわりに覆いかぶされて負けているところが自分だと思った」など。そして手がかかる生徒の回答に、担任は涙ぐむ。私も感動したので、担任が涙ぐんだひまわりを紹介します。「なんだかんだで身の回りに人がいる。自分が気づかないだけで多くの人が自分を支えてくれている。自分が悩めば人に支えられ、自分が困れば人に支えられ、自分が輝くためには多くの人に支えられる必要がある。でも、このひまわりたちが同じ花びんから咲いているように、支えてくれる人もまた悩んだり、困ったりするんだと思う。だからそういう時、ぼくは周りを支えられる人になりたい。」……。鑑賞で、中学生では難しいだろう内面を表現できてしまう授業実践事例でした。

質疑では、何もないところから自分の考えを生成する力が落ちている、ネットで見たことを自分の考えのように出してくる、そのような現状に悩まされているというお悩みに対して、対話型鑑賞と言いながら中々

対話にならない問題に対し、書かせる・書いたメモを2人組で対話させる・全体の対話に導いていくといった手法でうまくいくのではないかというお考えもいただきました。

上野さん、本日は、美術鑑賞の奥深さとそれを実現させる先生の重要性について考える貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございました。

以上